「前進あるのみ」の指導（中）

大器小沼ケガ負う

鏡山部屋初の幕内力士・小沼は迷いの淵にいた。昭和53（1978）年初場所。当時十両だったが、自分の手で発作的に力士の命・マゲを切ってしまったのだ。2年前の51年春場所、20歳で新入幕。1㍍81、134㌔で左四つからグイグイ寄って出る若さあふれる取り口に辛口だった二子山親方（初代横綱若乃花）がテレビ解説で「これはいい若者だ。大関までは十分行ける」と感心した。相撲記者たちも前に出る圧力に加え、懐の深さから「北の湖二世」の異名を付け、横綱候補と推すほどだった。

しかし好事魔多し。入幕2場所目の夏場所3日目、青葉城戦で悲劇に襲われた。相手の左外掛けをこらえて左足首を骨折。全治3カ月の診断だったが、痛めた足が治り切らなかったのだ。以降は逆境の土俵。幕下に陥落後、十両に番付を戻し踏ん張ったが「足が元通りに動かない」と落胆、気力の衰えは明らかだった。

昭和61年名古屋場所前の記念撮影

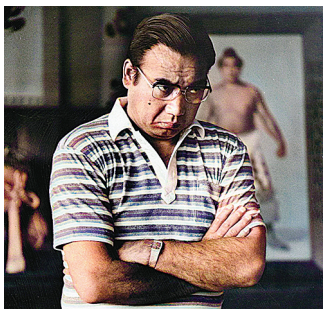
マゲを切っちまえ！

マゲを切った場所は幕内返り咲きを狙える位置の西十両2枚目。その10日目の朝稽古がきっかけとなった。師匠から厳しい叱責を受けたのは、兄弟子・蔵玉錦の方だった。「そんな甘っちょろい相撲を取っているんだったら、マゲ切ってやめちまえ！」。怒号が稽古場に響き渡った。

新春の底冷えした稽古場。寒さもあって、小沼の左足首はズキズキ身にしみる痛さがあった。師匠の兄弟子への大声は緩んだ稽古場の空気に気合を入れるためだった。しかし小沼の耳の底には「マゲを切っちまえ！」の言葉ばかりが生々しく残った。

その日の土俵は栃勇にいいところなく敗れて3勝7敗。負け越しに待ったなしとなった。「幕内の土俵にはもう戻れないのかもしれない」絶望感が頭をもたげた。

だが相撲に敗れた直後、審判長の仕事のため国技館にとどまっていた親方から付け人を通して「夜のちゃんこを食べず、首を洗って待っていろ」との過激な命令が伝わってきた。



親方は弟子の取り口に気持ちが入っていないと見て、反発心を期待して一喝したのだった。だが小沼は夕暮れの稽古場で人知れず自らマゲを切り、その足で埼玉県春日部市の実家に戻ってしまった。

いったん元サヤに

「私が悪かった」親方は小沼の実家を訪れ、本人と、その父の前で深々と頭を下げた。しかし一度切れた情熱は戻らなかった。この場所はそのまま途中休場し、次の春場所からザンバラ髪のまま相撲を取ったが4場所連続負け越し後、引退した。「負けたくて相撲を取っている人はいない。オレだって勝ちたくて、番付を上げたくて相撲を取っていた。ケガは自分なりに長期展望を立てて治そうと思っていたのだが…」。引退後、寿司職人になり、店を構えた小沼は苦渋を込めて振り返った。親方夫妻は数年後、小沼の結婚式にそろって出席するなど、もつれた仲は修復された。

師匠は弟子たちに「気合を入れろ」「前に出ろ」と指導した。稽古場では時に怖すぎる表情も

直線的な指導裏目に

力士が負ったケガにどのように対処するかはいつの時代も判断が難しい。古傷になるのを怖がると稽古量が減り、自分自身の壁をつくることになる。だが無理をし過ぎればそれこそ致命傷だ。多かれ少なかれ力士はケガを抱える。指導者は自分の現役時代と照らし合わせながら「弱音を吐いてどうする」的な接し方をする場合のほうが多い。

鏡山も柏戸の現役時代、からだの硬さがあって、ケガは多かった。しかしそれを恐れず速攻相撲に磨きをかけてきたからこそ番付を上げてきた自負があった。

小沼が相撲に迷いを生じさせていた当時の親方は40歳前後だった。直線的な指導の中で大器を失ったショックは大きかった。「小沼は残念だったなあ」その後も折々思い出しては天を仰いだ。一方で多賀竜がまさかの幕内優勝を果たした蔵前最後の昭和59年秋場所もまた思い出深い場所だった。

＝敬称略＝（富樫　嘉美）

毎週火曜日付に掲載

柏戸が育てた関取

シコ名	最高位	出身
蔵玉錦	幕内西1	山形市
小沼	幕内東9	埼玉県春日部市
魄龍	十両西1	旧藤島町
多賀竜	西関脇	茨城県日立市
佐ノ藤	十両東5	北海道別海町
起利錦	幕内東2	群馬県桐生市
鳥海龍	十両東9	遊佐町

※昇進順